

シェイクスピアのソネット集における dramatic structure について

風 間 和 子
Kazuko KAZAMA

1. はじめに

シェイクスピアのソネット集は謎に満ちた作品であるために、これまで多くの議論を巻き起こしてきた。このソネット集には Mr. W. H.¹⁾ なる人物を対象にした126のソネットと、dark lady と称される女性を歌った28のソネットの計154のソネットが含まれている。便宜上、前半の貴公子に宛てたソネット群を youth group と、後半の女性に宛てたソネット群を dark lady group と呼ぶことにする。同時代のソネット集では、一人の女性に対する愛を歌い、自分の愛を受け入れてくれない冷酷さ（貞潔）を嘆くのが通例である。それに比べて、シェイクスピアのソネット集は雰囲気異なる二つのグループを有するのみではなく、詩人と貴公子と dark lady（詩人の恋人）との間に三角関係が生じるというきわめて稀な構成となっている。また、貴公子をめぐる patronage（後援）を競うことになる rival poets までも登場し、彼らの関係はさらに複雑な様相を呈する。

制約の多いソネット形式の中にこのような dramatic structure を持ち込んだ詩人はソネット集史上シェイクスピアが始めてである。youth group では美貌の男性に対する愛情と苦悩が描かれており、dark lady group では伝統的な美の基準から大きく逸脱している女性に対する熱病のような欲望に焦点が当てられている。二つのグループは一見対立しているようであるが、貴公子と dark lady が情を通じることによって、互いに関連してくる。

シェイクスピアはこのような劇的構造を駆使して、一体何を表現しようとしたのだろうか？ソネット集にはさまざまなテーマが含まれており、それはシェイクスピアの才能の豊かさを示すものであるが、主なテーマは“I”（ソネット集の語り手）の貴公子に対する愛である。そして二人の間にたちはだかる“impediments”（障害）として、貴公子の美を破壊しようとする Time, dark lady, rival poets などが次々と登場する。ソネット集には“I”がこれらの障害を乗り越えて愛を成就しようとする過程がドラマチックに表現されている。そしてソネット116では理想的な愛の姿が描かれているが、“I”の貴公子に対する愛は果たしてこのような愛の理想に到達しえたのだろうか。

ともあれ、シェイクスピアはソネット集に dramatic structure を取り入れることによって同

時代のソネット集には見られない緊張感と迫力を生み出した。さらに彼は他にも読者をあつと驚かせるような仕掛けを用意して十四行詩の中に彼独自の世界を作り出している。本論ではこのような劇的な構成に着目しつつ、個々のソネットの分析を通じて、愛の行方を見極めたいと思う。

第一章 これまでのソネット集の研究と批評について

まず、先人たちの膨大な研究及び批評に耳を傾けることから始めたい。そして過去のソネット集研究に対する私の立場を明らかにしておきたいと思う。

第一に、ソネット集はいつ書かれたのだろうか？また Mr W. H と dark lady、rival poets はそれぞれ何者なのだろうか？この二つの問題は密接に関連している。すなわち、制作時期を1590年代の前半に置くならば Mr. W. H は1573年に生まれた Henry Wriothesley, third Earl of Southampton (シェイクスピアは彼に Venus and Adonis を献呈している) ということになるだろうし、貴公子が1580年に生まれた William Herbert, third Earl of Pembroke だとすれば1590年代の後半に書かれたと思われる。貴公子は若さの盛りを謳歌している美貌の君でなければならず、二人とも名前が W. H のイニシャルに一致しているからである。そして詩人と貴公子の後援を競うことになる rival poets が誰なのか、dark lady は何者なのかについてもさまざまな憶測がある。²⁾ この制作年代と登場人物の正体を特定しようとする研究は多くあるが、いまだ決定的な結論には至っていない。それはシェイクスピア自身についても不明な点が多いことと無関係ではないだろう。またソネット集の内容が公開をはばかるような事柄を含んでいるので、人物の特定が出来ないようにわざとあいまいにしたのかもしれない。これは Quarto 版がシェイクスピアの許可を得て出版されたものかどうかという疑問にもつながっていく。貴公子や dark lady のモデルとなった人物が誰であろうと、ソネット集の登場人物そのものでないことは言うまでも無いが、ソネット集を読んでいく際の参考にすることまで排除する必要は無いと思う。そして制作年代に関しては、他のシェイクスピアの劇作品との言葉やアイデアの類似から1590年代の半ばから1610年までの長期間にわたって断続的に書かれたものと思われる。³⁾

第二に、ソネット集をシェイクスピアの自叙伝のように読む研究者も少なくない。ソネット集がシェイクスピアの作品の中で、唯一一人称で書かれたものである以上、その中に彼の実人生を読み取ろうとするのは、無理のないことである。またソネット集がシェイクスピアの実体験を忠実に再現したものではないとしても、ソネット集に表現されているのは確かに彼の意識であり、感情であり、思想であることは否定できない。しかし、創作者としての彼が実体験を基にして何を表現しようとしたのかが重要なのであり、ソネット集の“*I*”が必ずしも作者その人であるとは限らないのではないだろうか。以下の論文ではソネット集にお

ける語り手である“I”を「詩人」と呼ぶことにする。そして詩人はいつも或いは必ずしもシェイクスピアその人であるとは限らない。

第三に、個々のソネットの順番を並べ替えようとする試みもなされてきた。確かにソネット集を読むと、一貫性にかけるところや順序を間違えて配列したのではないかと思える箇所がある。しかし、並べ替えることによってまた新たな問題が生じるので、私は Quarto 版の順序を基本的に正しいとする立場をとる。

第四に、ここ二、三十年の間に、新しい種類の批評が現れてきている。その中には gay や homosexuality の立場からソネット集を読むとする動きや、フェミニズムや社会史や文化史、精神分析学の立場からソネット集を解釈しようとしたりする研究も含まれる。特に近年ソネット集を homosexual love あるいは bisexual love を描いたものとする批評が多く見られるが、それは gay が社会的に認められつつある現在の状況と無関係ではあるまい。いずれの研究も興味深いものではあるが、ある主義なり基準なりを抱いて作品に接する危険性をはらんでいるように思われる。

最後に、Petrarchan convention (ペトラルカの伝統) との関係について一言しておきたい。周知の通り、この伝統は十四世紀のイタリアで、ペトラルカの Canzoniere に端を発している。これは、J. W. Lever によると、フランスのトルバドール (吟遊詩人) のバトロンの対する厳しい封建的な愛の奉仕と、トスカナ (イタリア) の詩人たちの女性に対する天上的な美しさへの賞賛との二つの要素から成り立っている。⁴⁾ ペトラルカの伝統は多くの追従者たちによってたちまちヨーロッパ中に広まった。もちろんイギリスにも Thomas Wyatt によって伝えられ、エリザベス時代の詩人たちに大きな影響を与えた。特にソネット集の中でその影響を受けていないものは皆無であると言ってもいいほどである。詩人たちはペトラルカの模倣から始めた。Philip Sidney の Astrophil and Stella や Edmund Spenser の Amoretti、Samuel Daniel の Delia には明らかにペトラルカからの借用や影響が多く見られる。シェイクスピアといえどもペトラルカの伝統から完全に自由であることは不可能である。シェイクスピアのソネット集にもペトラルカ風のテーマや conceit (奇想) が見られるが、彼はこの伝統を主に youth group において使っている。他方、普通は女性に適用されるはずのペトラルカ風の描写は dark lady group には全く見られない。ここでもシェイクスピアは読者を驚かせるドラマチックな仕掛けを作り出している。

第二章 Youth Group における愛

1. 貴公子に対する初期の愛

1～16のソネットの中で、詩人は貴公子の類まれな美しさを称え、その美しさを自分だけで終わらせずに結婚して子供に受け継がせるようにと説得を試みる。これらのソネットを

procreation sequence と呼ぶことにする。

ソネット 1 は “fairest creatures” (最高に美しい人々) はその “beauty’s rose” (美のバラ) を子供たちを通じて永遠なものにする義務があるという一般的な叙述で始まる。

From fairest creatures we desire increase,
 That thereby beauty’s rose might never die,
 But as the ripener should by time decrease,
 His tender heir might bear his memory:
 But thou, contracted to thine own bright eyes,
 Feed’st thy light’s flame with self-substantial fuel,
 Making a famine where abundance lies,
 Thyself thy foe, to thy sweet self too cruel.
 Thou that art now the world’s fresh ornament,
 And only herald to the gaudy spring,
 Within thine own buduriest thy content,
 And, tender churl, mak’st waste in niggarding:
 Pity the world, or else this glutton be,
 To eat the world’s due, by the grave and thee.

第二連では詩人の期待に反して、貴公子は結婚を嫌がって自分自身の輝くひとみと結婚している。つまり彼は女性との正常な結婚の豊かさ(子孫を残すこと)ではなくて、不毛な独身を選んでいる。第三連になると “niggard” (けちんぼう) のイメージが導入され美しさを自分の蓄の中に閉じ込めている貴公子は “tender churl” (優しい欲張り) と呼ばれる。最後のカブレットで詩人は世間の取り分を食い尽くす大食漢にならぬようにと貴公子に忠告する。

この冒頭のソネットには procreation sequence のみならずソネット集全体に見られるイメージや概念や技法が数多く含まれている。その豊かさには驚くばかりである。たとえば美を表す “rose” のイメージはソネット 5、ソネット 6 における “distillation” のイメージと結びついていく。

But flowers distilled, though they with winter meet,
 Leese but their show; their substance still lives sweet.

前後関係から、“flowers distilled” (蒸留した花) は “procreation” を表し、バラから抽出された香水は貴公子の美のエッセンスとしての息子に言及していることは明らかである。また “niggard” のイメージはソネット 4 や 9 で “usury” (高利貸し) のイメージへと発展していく。

Profitless usurer, why dost thou use

So great a sum of sums yet canst not live ?

そして “tender churl” (優しい欲張り) や “mak'st waste in niggarding” (けちけちしながら浪費する) のような oxymoron (撞着語法) や、famine-abundance (飢饉-豊穰), hoarding - waste (貯蔵-浪費) などの taxonomy (対比的分類法) はソネット集で多用される技法である。従ってソネット 1 は Vendler の言葉を借りると、“a preface to others or notes of the sequence” (ソネット集の序文或いは注釈) であると言えるかもしれない。⁵⁾

ソネット 12 で詩人は美のはかなさ、移ろいやすさに言及し、“Time” の攻撃から身を守るためには子供を残すべきだと説く。

When I do count the clock that tells the time,
And see the brave day sunk in hideous night,
When I behold the violet past prime,
And sable curls all silvered o'er with white;
When lofty trees I see barren of leaves,
Which erst from heat did canopy the herd,
And summer's green all girded up in sheaves
Borne on the bier with white and bristly beard:
Then of thy beauty do I question make
That thou among the wastes of time must go,
Since sweets and beauties do themselves forsake
And die as fast as they see others grow,
And nothing 'gainst Time's scythe can make defence
Save breed to brave him, when he takes thee hence.

このソネットで初めて一人称の “I” が使われる。詩人は “brave day” (輝かしい太陽)、“violet” (すみれ)、“sable curls” (黒い巻き毛)、“lofty trees” (大木)、“summer's green” (夏の緑) などの具体例を挙げて、すべてのものは時の流れの中で移ろいゆく運命にあると述べる。カブレットでは擬人化された、鎌を振るう “Time” が登場する。このソネットに見られる美の移ろいやすさと言うテーマは同時代のソネット集にも見られるもので、特に Samuel Daniel の *Delia* に多く見られる。そしてダニエルがデリアの美しさが移ろいやすいことを歌う時には、美しさが消えないうちに “carpe diem” (現在を楽しむこと) を彼女に勧める。⁶⁾

Now joye thy time before thy sweete be dunne
And learne to gather flowers before they wither
だから自分の愛を受け入れるようにと迫るのが常套手段である。
But loue whilst that thou maist be lou'd againe

Pittie and amyls doe best become the fayre

しかしシェイクスピアのソネット集にはこのような“carpe diem”の概念は見られない。「若さの頂点にある現在を楽しめ」と言う考えは当然のことながら時の暴虐を従容として受け入れる態度であるのに対して、ソネット集の詩人は時の攻撃に抵抗を試みるからである。一方、他のソネット集には procreation のテーマは殆ど見られない。彼らの関心は女性に対するプラトニックな愛情で、女性に子作りを勧めるというのは自分との性的関係をあからさまに迫ることになり、おしつけでもあるからだろう。ともかくソネット 1～16までの詩人の貴公子に対する態度はたとえば伯父が甥を諭すような穏やかな愛情に満ちている。少なくともこの procreation sequence の中には homosexual な関係をうかがわせるようなものはみられないように思われる。

2. 安定した愛

貴公子が詩人の勧めに従って結婚して子供を作ろうとしないので、詩人は時に対抗する次の手を考える。それは自らの詩の中に貴公子の美しさを閉じ込めて、永遠化するというのである。

Shall I compare thee to a summer's day?
 Thou art more lovely and more temperate:
 Rough winds do shake the darling buds of May,
 And summer's lease hath all too short a date;
 Sometime too hot the eye of heaven shines,
 And often is his gold complexion dimmed;
 And every fair from fair sometime declines,
 By chance or nature's changing course untrimmed:
 But thy eternal summer shall not fade,
 Nor lose possession of that fair thou ow'st
 Nor shall Death brag thou wand'rest in his shade
 When in eternal lines to time thou grow'st.
 So long as men can breathe or eyes can see,
 So long lives this, and this gives life to thee.

この18番のソネットはよく知られたソネットで、「あなたを夏の一日に例えようか?」と言う詩人の恍惚としたつぶやきで始まる。そしてソネットの前半で夏の日（イギリスで一番美しい季節）のイメージ（the darling buds of May, the eye of heaven）を駆使して、美のはかなさを歌い、あらゆる美しいものはいつか凋落の日を迎えることを認める。しかし第3連と

カブレットで詩人は夏の日よりも穏やかな貴公子の美を守るために、自分の詩の中で不滅の命を与えると力強く約束する（shall not の繰り返しは効果的だ）。死（Death）への挑戦が詩人としての自信と貴公子に対する愛情に裏打ちされていることはいうまでもない。

さて問題の20番のソネットは詩人と貴公子の関係を homosexual なものであるとする研究者がその主な根拠とするものである。

A woman's face with Nature's own hand painted
 Hast thou, the master-mistress of my passion;
 A woman's gentle heart, but not acquainted
 With shifting change, as is false women's fashion;
 An eye more bright than theirs, less false in rolling,
 Gilding the object whereupon it gazeth;
 A man in hue, all hues in his controlling,
 Which steals men's eyes and women's souls amazeth.
 And for a woman wert thou first created,
 Till Nature as she wrought thee fell a-doting,
 And by addition me of thee defeated,
 By adding one thing to my purpose nothing.
 But since she pricked thee out for women's pleasure,
 Mine be thy love, and thy love's use their treasure.

まず二行目の“the master - mistress”の“master”を“preeminent, supreme”をとるか、あるいは“Mr.”をとるか、またその次の“passion”を“strong feeling”をとるか、あるいは“sexual love, physical desire”をとるか、詩人と貴公子の関係が男性間の友情であるか、肉体関係を伴う同性愛であるかに意見がわかれる。⁷⁾ ソネット集を女性に宛てたものと思って読んできた読者は（相手の性別を特定する代名詞は一度も使われていないのだが）“the master - mistress”（男の恋人）に出会ってショックを受ける。同時に、なぜ詩人がぶしつけととれる“procreation”を熱心に勧めてきたのかを理解する。一連で貴公子は女性的な美貌の持ち主でありながら、女性特有の心変わりや目移りとは無縁の男性として描かれている。二連では「姿は男だが、あらゆる容色を備えているので、男の目を奪い、女の心を迷わせる」と続く。この箇所は貴公子の両性具有的な魅力を表現しているように思われる。ソネット53でも貴公子は美少年アドニスと絶世の美女ヘレンの両方に例えられている。第三連では自然の女神（Nature）があなたを始めは女性として作ったのだが、あなたに恋をしてしまったので、私には余計な一物をつけて男性にしてしまったと言うユーモラスな話を付け加える。カブレットでは「あなたの愛情こそが私のもので、あなたの愛を使うのは女性の宝だ」締めく

くる。確かに“the master - mistress of my passion”（私の愛する男の恋人）という表現は同性愛をほめめかしているようにも思われるが、三連からカブレットにかけてはそれを否定しているともとれるあいまいな表現になっている。

このような男性間の友情や愛情についてはプラトンの時代にまでさかのぼらずとも、あらゆる時代、あらゆる場所で見ることが出来る。特に十六世紀のイタリアでは男性的な美に対するルネッサンス的な情熱と相まって、男性間の愛情が賞賛された。イギリスでも男性間の愛情はもてはやされ、シドニーの *Arcadia* や、スペンサーの *Faerie Queen* などのような作品に材料を提供してきた。スペンサーは友人たちを“another sort of louers lincked in true harts consent”と呼んでいる。⁸⁾

しかし最近では二人の愛情はこのような精神的なものではなく肉体関係を含んだ同性愛だとする見方が多い。以前は詩人と貴公子の愛情が肉体関係を伴った同性愛だと声高に主張する批評家は少数派であったが、現在では事情が異なっている。それは、前にも述べたように、同性愛が社会的に認知されてきていると言う事情と大いに関係があると思われる。

また当時の同性愛に関する研究によって新たにいくつかの事柄が明らかにされてきた。ルネッサンス時代のイギリスでは同性愛は異性愛よりも安全であると考えられていたようだ。なぜなら結婚外の女性との関係によって子供が生まれると、後継ぎの正当性が脅かされるからで、父権制社会の存続のために女性には貞節が求められた。それに対して、裁判の記録などを見ても男性同士の同性愛はよほどのことが無い限り大目に見られていたらしい。⁹⁾ 従ってソネット集にまつわるスキャンダルはこれまで考えられていたような詩人の貴公子に対する欲望ではなく、むしろ dark lady に対する性的耽溺のほうであるという説もある。¹⁰⁾ また当時の劇場では女優は存在せず、少年が女性の役を演じていたので、少年役者が同性愛の対象になることは自然な成り行きだったのだろう。そしてシェイクスピアのドラマでは女性の役を演じている少年がドラマの筋書きの中で男性に変装するという場面がたびたび出てくる。このように劇場という空間の中では男性と女性の性差があいまいになり、¹¹⁾ その中にいたシェイクスピアにとって、女性的な美貌を持つ貴公子はある意味で馴染み深い存在だったのかもしれない。

しかしこうした事情を考慮に入れてもなお幾つかの疑問は残る。詩人の貴公子に対する描写は肉体の他の部分よりも目を媒介とした貴公子の女性的な顔の美しさに集中している。（ソネット 2、3、20、24、93）¹²⁾ また、同性愛の関係にある男性に向かって、女性との性交渉を前提とする procreation を勧めたりするだろうか？更に、youth group では貴公子との性的関係をうかがわせるような部分があっても、あいまいではばかるような表現となっているのに対し、dark lady group では彼女との肉体関係をはっきりとあらわにしている。もしも彼らの言うように、当時は男性との性的関係よりも女性との関係のほう危険視されていた

のなら、逆の扱いになるはずではないだろうか。またソネット116で詩人は貴公子との関係を “the marriage of true minds” (真実の心と心の結びつき) と表現している。従って詩人の貴公子に対する愛が同性愛であるとの主張には疑問が残る。

ともかく、このソネットを境にして詩人と貴公子の関係は年長者が若者をいさめるような穏やかな愛情から少しずつ変質していく。このソネット以降、詩人の貴公子に対するただならぬ愛 (同性愛であろうとなかろうと) に焦点が当てられていく。またこの段階のソネットにはペトラルカ風のテーマや conceit (奇想) が数多く見られるが、貴公子の美しさが女性的なことを考えると別に不思議は無いのかもしれない。

ソネット22では恋人同士の心の交換という伝統的なテーマを扱っている。第一連で詩人は貴公子が若く美しい限り、詩人も年をとることは無いと述べる。なぜならば二人はお互いの心を交換していて、詩人と貴公子は一体化しているからで、だから自分を大事にするように懇願する。

For all that beauty that doth cover thee,
Is but the seemly raiment of my heart,
Which in thy breast doth live, as thine in me:
How can I then be elder than thou art?

このような恋人同士が心を交換するというアイデアはエリザベス時代の詩にはよくみられるもので、たとえば Philip Sidney の *Arcadia* にも現れる。

My true-love hath my heart, and I have his,
By just exchange one for another given:
I hold his dear, and mine he cannot miss,
There never was a better bargain given:
My true-love hath my heart, and I have his.

また eye と heart の奇想も伝統的なものである。シェイクスピアはこのこじ付けとも言えるユーモラスな奇想をソネット24で取り上げている。すなわち「私の目が画家となって君の美しい姿を私の心という画布に描き、私の体とそのフレームとなって絵を支えていると」いう。

Mine eye hath played the painter and hath stelled
Thy beauty's form in table of my heart;
My body is the frame wherein 'tis held,
And perspective it is best painter's art.

このように、心の交換や目と心の奇想を取り上げるシェイクスピアの態度は貴公子に対する熱烈な愛を歌うというよりは、お互いの愛情を確信しつつウィットにとんだ作詩を楽しん

でいるよう思われる。

さらにソネット25やソネット29では世間の栄華とは無縁の詩人も貴公子の愛に包まれて幸せなので、王の身分とさえ今の自分の境遇を交換するつもりは無いと述べる。

Then happy I that love and am beloved
Where I may not remove, nor be removed
For thy sweet love rememb'ed such wealth brings
That then I scorn to change my state with kings.

2. 貴公子の過失

しかし二人の安定した相思相愛の状態は長くは続かず、陰りが見え始める。貴公子の第一の過失は詩人の恋人である dark lady との情事である。この過ちに対して詩人は苦しみながらも、さまざまな奇想を使って貴公子をかばい許そうとする。この詩人の卑屈ともとれる態度は二人の社会的身分の違いを暗示しているのかもしれない。ソネット25、29、38、110などでそれとなく言及されているように、詩人は自らの惨めな境遇を嘆き自分の運命を呪っているのに対し、貴公子は多くの詩人から詩をささげられるような身分 (patron) であったと思われるからだ。当時詩人の地位はまだ低く、貴人のpatronage (後援) を受けずにペン一本で生計を立てることは困難だった。十六世紀になって、印刷術の発達によって多少は改善されたものの、職業詩人の生活は惨めなものでパンフレットを一つ書いても彼らが印刷業者から受け取る報酬は四十シリングにすぎなかった。¹³⁾ 貴公子が他の詩人に愛情を移したのを契機に、詩人は貴公子に別れを告げざるをえなくなっていく。これらの詩人の態度から彼の愛は自分の心を殺した無私の愛であって、トルバドールの詩人たちにみられるパトロンに対する奉仕の態度を想起させる。

(1) dark lady との情事

ソネット35で "sweet thief" (優しい盗人) とほめかされた貴公子の過ちはソネット40～42の中で詩人の恋人を奪うというひどい裏切りであったことが明らかにされていく。ソネット40は "Take all my loves, my love, yea take them all;" 「愛するものよ、私の愛も私の恋人もすべて奪うがいい」という詩人の怒気を含んだ叫びで始まる。しかし詩人は「私を愛しているから私の女を受け入れたのなら、君をとがめるわけにはいくまい」と苦しい論理を展開する。

Then if for my love thou my love receivest,
I cannot blame thee, for my love thou usest;

またソネット41では愛と憎しみの間で揺れ動く詩人の矛盾する感情が表現されている。第一連で彼は貴公子の行為を彼の若さと美貌のせいにする。

Gentle thou art, and therefore to be won,
Beauteous thou art, therefore to be assailed.

しかしそのあとで「私のものには手をつけなくても良かったのに」と貴公子のひどい仕打ちを嘆いている。

Aye me, but yet thou mightst my seat forbear,
And chide thy beauty, and thy straying youth,

さらにソネット42では identity の奇想を使って貴公子を弁明し、かつ自分の複雑な心情を慰めようとする。

That thou hast her, it is not all my grief,
And yet it may be said I loved her dearly;
That she hath thee if of my wailing chief,
A loss in love that touches me more nearly.
Loving offenders, thus I will excuse ye:
Thou dost love her because thou know'st I love her,
And for my sake even so doth she abuse me,
Suff'ring my friend for my sake to approve her.
If I lose thee, my loss is my love's gain,
And losing her, my friend hath found that loss,
Both find each other, and I lose both twain,
And both for my sake lay on me this cross.
But here's the joy, my friend and I are one:
Sweet flattery! Then she loves but me alone /

第一連で詩人は「君が彼女を手に入れたことがわたしの悲しみのすべてではない」と言いつつも、すぐ次の行で、「私は彼女を心から愛していたのだが」と打ち消し、また「彼女が君をものにしたことの方が骨身にこたえる損失だ」と貴公子の裏切りに揺れる思いを表現する。にもかかわらず二連ではすぐに二人の弁明を始める。「君は私が彼女を愛しているのを知って彼女を愛したのだし、彼女のほうも私のために君と関係を持つにいたったのだ」と。そして三連では「私が君を失ってもそれは彼女の得になり、わたしが彼女を失っても君がそれを見つける。私がふたりを失えばふたりはお互いにみつけあい、私に十字架を背負わせてくれる」と苦しい詭弁を続ける。詩人は二人との関係を維持しようとして、カブレットで「友と私は一つなのだから、彼女は私だけを愛しているのだ」と結ぶ。“sweet flattery”（甘美な幻惑）という表現の中に、こじつけてでも二人との輪の中になりたいと思う詩人の自嘲的な悲しみが感じられる。

(2) rival poets の登場

詩人の女との情事以上に彼を悩ませたことは、貴公子が他の詩人たちに心を移したことであった。ソネット78～86までは rival poets group と呼ばれる小さなグループを形成している。このグループの目的は詩人の“true plain words”（真実で飾らない言葉）と他の詩人たちの“gross painting”（ごてごてとした厚化粧）を、また詩人の貴公子に対する心からの愛と rival poets のその場限りの追従を区別することである。このグループを通じて嫉妬にさいなまれた詩人の心情は貴公子と rival poets に向けられた風刺的な皮肉な言葉で表現されている。

まずソネット76で詩人は自分の詩には流行のレトリックがなく、変わり映えがしないし、時代遅れであるといっている rival poets の存在を暗示する。

Why is my verse so barren of new pride?

So far from variation or quick change?

Why with the time do I not glance aside

To new-found methods, and to compounds strange?

そして rival poets がはじめて登場するソネット78で彼らは“every alien pen”（よその詩人）と呼ばれている。この“alien”という言葉には彼らが貴公子と詩人の親密な関係に入り込めないという意味が含まれているが、一方で rival poets を“a worthier pen”（私よりも立派な詩人）や“a better spirit”（優れた人）と呼び一応謙虚さも見せる。ソネット82では詩人は貴公子の不実な行為を正当化して、君は容姿のみならず知識にも優れているのだから、他の詩人たちの賛美を受け入れるのも当然だと皮肉な調子で語りかける。しかし最後の4行で貴公子の美しさには詩人の簡素で真実な言葉こそが相応しく、他の詩人たちの厚化粧は君には必要だと指摘する。

Thou, truly fair, wert truly sympathised

In true plain words, by thy true-telling friend;

And their gross painting might be better used,

Where cheeks need blood, in thee it is abused.

ここで詩人は貴公子の美をありのままに賛美する自らの詩の平明さと率直さに自信を持っていて、他の詩人たちの修辞法で飾られた大げさな賛美と一線を画そうとしている。

しかしまもなく詩人は自分が rival poets にとって代わられ、貴公子の心を独占することは出来ないことに気づく。これは自分の恋人を奪われてもなお貴公子を許そうとした詩人にとって絶えがたい仕打ちだったに違いない。貴公子は詩人の不幸な境遇をおぎなうて余りある、この世に二人としない存在であった。そうした人を失うことは詩人にとって死にも匹敵することで、貴公子と別れようという決意には当然厳しい自己否定が伴う。貴公子を失うかもしれないという恐れと絶望のなかで詩人は貴公子に別れを告げる。

Farewell, thou art too dear for my possessing,
And like enough thou know'st thy estimate;
The charter of thy worth gives thee releasing:
My bonds I thee are all determinate.
For how do I hold thee but by thy granting,
And for that riches where is my deserving?
The cause of this fair gift in me is wanting,
And so my patent back again is swerving.
Thy self thou gav'st, thy own worth then not knowing,
Or me, to whom thou gav'st it, else mistaking;
So thy great gift, upon misprision growing,
Comes home again, on better judgement making.
Thus have I had thee as a dream doth flatter,
In sleep a king, but waking no such matter.

一連で詩人は“bonds”（所有権），“determinate”（終了），“patent”（特権）などの法律用語や商業用語を使って二人の別離を機械的に割り切ろうとする。貴公子は彼も知っての通り、詩人が独占するにはあまりにも貴重すぎるので、詩人の所有権は完全に終了したことを認める。二連では自分は貴公子の愛を享受する正当な理由が無いのでふさわしくないと、悲しい諦めの心情を述べる。そして自分がこれまで貴公子の愛という偉大な賜物を受けてきたのは貴公子が自分の真の価値を知らなかったからで、彼が判断しなおしたのだから彼の元に返すべきだと続ける。このように二人の愛の解消を避けられない結果だと認めつつも、詩人の孤独と悲しみはぬぐいきれず、カプレットで悲観的な心情を吐露する。このソネットでは“feminine ending”（強弱のリズムで終わる）が使われていて、詩人のやや女々しい訴えと嘆きによくマッチしている。さらに最後の行の“King”という単語はソネット29で歌われた、かつての詩人の至福を思い起させる。

For thy sweet love remember'd such wealth brings,
That then I scorn to change my state with Kings.

貴公子の愛に包まれて幸せだった頃の詩人の喜びは現在の惨めな状況と対照的で、詩人の悲哀をいっそう深めている。こうして詩人は貴公子の愛を諦めて一時的に貴公子の元を去ることになる。

第三章 Dark Lady Group における愛

そして、Thorp の Quarto 版では youth group の後ろに置かれている dark lady group もまた貴公子の罪を軽減するための一種の弁解と捉えることが出来る。dark lady には我々が普通ペトラルカ風の美人に期待するようなものはほとんどない。白い (fair) はずの肌の色は黒い (black) し、その瞳も髪の毛も黒く、貞節であるべきなのに誰とでも情を交わすといった具合である。

ソネット130で彼女は次のように歌われている。

My mistress' eyes are nothing like the sun;
 Coral is far more red than her lips' red;
 If snow be white, why then her breasts are dun;
 If hairs be wires, black wires grow on her head.
 I have seen roses damasked, red and white,
 But no such roses see I in her cheeks,
 And in some perfumes is there more delight
 Than in the breath that from my mistress reeks.
 I love to hear her speak, yet well I know
 That music hath a far more pleasing sound;
 I grant I never saw a goddess go -
 My mistress when she walks treads on the ground.
 And yet by heaven I think my love as rare
 As any she belied with false compare.

このソネットは Petrarchan convention に対するパロディとも挑戦とも言えるものだ。「私の女の目は太陽と比べるべくも無く、彼女の唇よりも珊瑚のほうがずっと赤い。雪が白ければ彼女の胸は薄黒く、頭には黒い針金が生えている。彼女の頬に赤や白や色混じりのバラが咲くことは無いし、彼女の息に比べたら香水のほうがまし・・・」といった具合に、ペトラルカ風美人の要素をことごとく否定していく。これは一見 convention にのっとって謳われた貴公子の美しさと対照的であるように思われる。しかし、我々の期待に反して、カブレットで詩人は「天にかけて私の恋人は偽りの例えで飾られた他のどの恋人にも引けを取らない」と前言を翻す。

そして、“black”なのは彼女の容貌だけではないことが明らかになっていく。ソネット137で彼女は“bay where all men ride”(あらゆる男たちが乗り入れる港)や“wide world's common place”(広い世間の共有地)と侮蔑的に表現されている。これは彼女の乱れた性生活に言及している。貞節を守るあまり求愛者にとっては冷酷とも見えるペトラルカ風の女性

とはなんと異なっていることか。したがって、詩人の彼女に対する求愛の仕方も convention とは異なり、卑猥な言葉遊びを駆使したふざけ半分の物となっている。

ソネット135は Will sonnets とよばれるグループの中の一つで、おそらくは貴公子の名前がシェイクスピアと同じ “Will” だったのかもしれないと思わせる地口を含んでいる。

Whoever hath her wish, thou hast thy Will,
And Will to boot, and Will in over-plus;
More than enough am I that vex thee still
To thy sweet will making addition thus /

一行目の “Will” には普通の “wish” という意味のほかに “lust” という含みがある。二行目の二つの “Will” は大文字のイタリック体で書かれているので、個人の名前に言及しているのかもしれない。おそらく “Will in over-plus” がシェイクスピアで、“Will to boot” は貴公子を指していると思われる。そして詩人は彼の “will” を彼女の “large and spacious will” (大きくて、広い欲望) の中に入れてくれるように頼む。すべての “Will” は一つなのだからと。このように詩人が恋人の恥知らずな情欲に言及したり、卑猥な言葉で求愛をするなどというのは Petrarchan convention では全く考えられないことである。

詩人の dark lady に対する愛はまず第一にお互いの偽りの上に成り立っている。ソネット138によれば、dark lady は貞節を誓う。(詩人は真実を知っているけれども、信じているふりをする) 一方詩人はうぶな若者のふりをする。(彼女は詩人がとうに盛りを過ぎたことを知っている) そしてカブレットで “lie” の語呂合わせ(寝るとうそをつく)を使って次のように締めくくる。

Therefore I lie with her, and she with me,
And in our faults by lies we flattered be.

第二に、二人の愛が sexual なものであることはいうまでもない。第三に、誰とでも寝るような dark lady に対する愛は盲目的な愛と呼ぶことが出来る。詩人の五感偽りの愛に反発しているのに心が彼女に溺れているからである。こうした愛は詩人の中にさまざまな葛藤を引き起こす。

ソネット141で eye と heart の葛藤が紹介される。「実際私は目で見えておまえを愛しているのではない。目はおまえのうちに無数の欠点を見ているのだから。しかし目が蔑むものを愛しているのは私の心だ」と。同じ目を取りあげているのに、このソネットは youth group のソネット24とまったく異なっている。

In faith I do not love thee with mine eyes,
For they in thee a thousand errors note,
But 't is my heart that loves what they despise

Who in despite of view is pleased to dote

そして、dark lady との情欲にまみれた関係から、次のような詩人の独白が生まれた。ソネット129は dark lady group の総括とも言えるソネットで、それはソネット116が youth group から導き出された普遍的なソネットであるのと似ている。

Th'expense of spirit in a waste of shame
Is lust in action, and till action, lust
Is perjured, murd'rous, bloody, full of blame,
Savage, extreme, rude, cruel, not to trust;
Enjoyed no sooner but despised straight,
Past reason hunted, and no sooner had,
Past reason hated as a swallowed bait
On purpose laid to make the taker mad:
Mad in pursuit and in possession so,
Had, having, and in quest to have, extreme;
A bliss in proof, and proved, a very woe,
Before, a joy proposed, behind, a dream.
All this the world well knows yet none knows well
To shun the heaven that leads men to this hell.

一連は lust の定義から始まる。「情欲の行為は恥辱の果てに精気を消費することだ」と。この“expense”や“spirit”に含まれる二重の意味に加えて、一行目から二行目にかけて用いられている倒置のテクニクは効果的だ。続いて行為に至るまでの情欲の特性がたくさんの形容詞を立てつづけに並べて描写される。「誓いを破り、殺人的で、残虐で、罪深く、野蛮、残忍、無慈悲にして、信用できない」この侮蔑的な形容詞の積み重ねの中に、詩人の情欲に対する嫌悪感が読み取れる。二連では「情欲が満たされるや、それは軽蔑され、情欲は (lust) 理性を超えて (past reason) 求められるが、得られるや否や理性を超えて (past reason) 憎まれる」と分析は続く。三連は二連までに述べられた情欲の性質を繰り返し、追い求めるときも (in pursuit)、手に入れても (in possession) そうだし、行為のあとも (had) 行為の最中も (having) 度を越した狂乱状態に陥るが、一旦満たされると悲しみだけが残るという。このように詩人は対照法や並列法を駆使して情欲のパラドキシカルな性格を強調する。しかしカブレットで三連までの流れは直ちに否定されてしまう。このようなカブレットにおける論理の逆転と言う手法はシェイクスピアがよく用いるもので、これまで引用したソネットの中にも見られる劇的手法である。カブレットは「世の中の人みんなこのことを知っているが、こういう地獄に導く天国を避けるすべは知らない」と結ばれる。“the world”

の中には dark lady の魅力に抵抗できずに彼女に溺れている詩人も貴公子も含まれている。従ってカブレットは詩人の自己嫌悪を慰め、彼女との情事を正当化する意図があると思われる。それはまた貴公子の dark lady との関係を弁護することにもつながっていく。

ソネット集の二つのグループを比較すると、youth group は貴公子に対する滅私的な愛の姿を歌っているのに対し、dark lady group では彼女に対する生々しい情欲が描かれている。二人の人物に対する詩人の態度はソネット144で対照的に述べられている。

Two loves I have, of comfort and despair,
Which like two spirits do suggest me still;
The better angel is a man right fair;
The worser spirit a woman coloured ill.
Tempteth my better angel from my side,
And would corrupt my saint to be a devil,
Wooing his purity with her foul pride.

もちろん、“love of comfort”（癒しの恋人）が貴公子で、“love of despair”（絶望をもたらす恋人）が dark lady を指していることは言うまでも無い。また貴公子は “the better angel”（いいほうの天使）と呼ばれ、dark lady は “the worser spirit”（悪いほうの天使）と呼ばれていることから分かるように、貴公子は崇められているのに、dark lady は貶められている。ここに見られる女性蔑視とも取れる態度は、ルネッサンスの女性観を如実に表している。当時女性は男性より知的に劣っていて、激情に駆られやすいものとみなされていた。また彼女たちは父権社会を維持するための子供を産む道具にすぎなかった。¹⁴⁾ 前に述べたように、男同士の愛情に比べて、男女間の愛は低く見られていた。理性では軽蔑しながらも惹かれずにはいられない dark lady 対して詩人は複雑で、矛盾する感情を抱いている。

第四章 理想的な愛の姿

シェイクスピアは何らかの外的な事情からソネット集を書き始めたのかもしれない。貴公子の母に頼まれて結婚を嫌がる彼を説得しようとしたと言う説などは考えられる動機の一つである。冒頭の procreation sequence で詩人は貴公子の美貌を称え、その美しさを彼の子供に受け継がせるように説得する。ここには余裕のある詩人の穏やかな愛情がうかがえる。しかしソネット20を境にして詩人の愛は少しずつ変化を見せ、彼は甘美さと苦痛の入り混じった愛憎の渦に巻き込まれていく。

しばらくの間、彼らはお互いの愛で結ばれていた。貴公子の愛は詩人の惨めな境遇や個人的な欠点を補って余りあるものだった。次第に詩人は貴公子の欠点や過ちにも気づくようになるが、常に寛大な心で貴公子を許そうとする。彼が詩人の恋人を奪った時でさえ、詩人は

苦しみながらも、貴公子のために詭弁を弄して苦しい弁解を試みた。このように詩人の貴公子に対する愛は自己否定による無私の愛であるといえる。しかし貴公子の関心が他の詩人たちに移った時、詩人の愛は試されることになる。こうして二人は別れることになり詩人は喪失感に苦しむが、しばらくして二人の関係は復活したかにみえる。

詩人の愛はソネット100～126で最終的な段階を迎える。ソネット102で詩人は“My love is strengthen'd though more weak in seeming”といって「自分の愛は弱まったように見えても実は強まったのだ」と述べ、ソネット107では死(Death)さえも自分に屈服し、ソネット108では常に新鮮な愛は時(Time)によって痛めつけられることも無いと力強く謳う。

このようにして詩人はさまざまな試練を経て、ソネット116で真の愛の概念を披瀝する。

Let me not to the marriage of true minds
Admit impediments; love is not love
Which alters when it alteration finds,
Or bends with the remover to remove
O no, it is an ever-fixed mark
That looks on tempest and is never shaken;
It is the star to every wand'ring bark,
Whose worth's unknown, although his height be taken.
Love's not Time's fool, though rosy lips and cheeks
Within his bending sickle's compass come;
Love alters not with his brief hours and weeks,
But bears it out even to the edge of doom.
If this be error and upon me proved,
I never writ, nor no man ever loved.

一連で彼は否定的に真実の愛の定義しようとする。多くの注釈者が指摘しているように“impediments”(障害)という言葉には結婚式の banns(結婚予告)における良く知られた一節を思い起させる。¹⁵⁾ 詩人は真実の心と心の結びつきに対していかなる障害も認めようとしない。そして「相手が心変わりしたからといって自分も心変わりするような愛は本当の愛ではない」と主張する。二連になると愛を肯定的に定義する。まず真の愛は嵐に遭っても決して揺らぐことの無い“ever-fixed mark”(堅固な灯台)や、さまよう船を導く“the star”(北極星)に例えられる。三連では「愛は時のもてあそび物ではない」と挑戦的に宣言する。これまでも詩人は Time(時)に対して常に敵意を抱いていて、決して妥協したり屈服したりすることは無かった。始め詩人は貴公子の美を保存するために、結婚して子作りをするように勧めた。時(Time)に対する生物学的な防衛を試みる際に、詩人の関心は貴公子の肉体的

な外面の美しさに向けられていた。そして貴公子には受け入れられなかったこの防護策に代わるものとして、詩人は自らの詩の中で貴公子の美を不滅なものにしようとした。最後に最強のTime（時）に対する対抗手段として、love（真実の愛）が登場する。真の愛の対象は当然のことながら生物学的な手段や文学的な手段の対象とは区別されるべきだ。彼によれば、“rosy lips and cheeks”（ばら色の唇や頬）は時の曲がった鎌で刈り取られるが、真実の愛は時の影響を受けないと言っている。“rosy lips and cheeks”が官能的な愛の対象（外面的な美しさ）を象徴していることは明らかで、詩人が理想とする愛は精神的なものであるように思われる。なぜならここで彼は外面的な美しさが色あせるとそれを対象とする愛は長続きしないが、真の愛は最後の審判まで持ちこたえると言っているからである。ここで謳われている愛の姿は dark lady group で描かれているような人を狂乱に陥れる情欲とははっきりと異なる。またこのソネットで述べられている愛の概念には明らかに聖書のコリント人への手紙の一節が投影されている。¹⁶⁾

Charity suffereth long, and is kind; charity envieth not; charity vaunteth not itself, is not puffed up doth not behave itself unseemly, seeketh not her own, is not easily provoked, thinketh not evil; rejoiceth not in iniquity, but rejoiceth in the truth; beareth all things, believeth all things, hopeth all things, endureth all things. Charity never faileth... (italics mine)

（愛は寛容であり、愛は情け深い。またねたむことをしない。愛は高ぶらない・・・そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。）そして詩人はカブレットで「これまで述べてきたことが誤りだとすれば、私は何も書かなかったし、誰も愛した人などいない」と力強く宣言する。

シェイクスピアのソネット集には明らかに調子の異なる二つのグループがあって、前半の youth group で描かれているのは男性に対する愛情（love）で、後半の dark lady group で描かれているのは女性に対する情欲（lust）である。色の白い貴公子は絶世の美女ヘレンに例えられるほど美しいのに対して、色の黒い dark lady は魅力的ではあるが伝統的な美の基準によれば決して美しいとはいえない。読者の期待に反して、Petrarchan convention にのっとって描かれているのは女性の dark lady では無く、男性の貴公子のほうである。また詩人は貴公子の美しさを Time の手から守るために procreation を勧めたり、自らの詩によって永遠の命を与えようとするが、dark lady group にはそのようなテーマは全く見られない。更に、詩人が賛美している貴公子との愛は挫折しているのに、軽蔑している dark lady に対する情欲は時々叶えられているようにみえる。このように対照的な二人の人物に対する愛を並列して描くだけでも他のソネット集に比べて十分にドラマチックな構成だと言える。

その上、一見対立しているかに見える二つのグループが貴公子と dark lady の裏切りによ

って、相互に絡み合うことになる。すなわちこれまで相違点だけが目立っていた貴公子と dark lady の類似点が次第に炙り出されてくる。外面的には完璧な美しさに恵まれている貴公子はソネット94や95で描かれているように、性的放縦を含む不道德な一面を見せ、それは dark lady のふしだらな身持ちと通じるものがある。ここで詩人は「どんなに美しいものも行為によってひどいものになるし、腐ったゆりは雑草よりも悪臭を放つ」と警告を発している。

For sweetest things turn sourest by their deeds ;

Lilies that fester smell far worse than weeds .

また二人に対する詩人の態度にも共通点がみられる。ソネット93で詩人は貴公子の罪に気づいていながら信じているふりをする。これは前に引用したソネット138における dark lady との偽りに満ちた関係と似ている。詩人は裏切られた夫のように貴公子を信じて生きていき、貴公子のほうも実は心変わりをしているのにうわべは愛を装っている。

So shall I live, supposing thou art true ,

Like a deceived husband ; so love's face

May still seem love to me, though altered new :

すなわち貴公子も詩人も dark lady とかわることによって、詩人が惹かれつつも蔑んでいる彼女の欺瞞に満ちた世界を共有することになる。さらに作者は rival poets まで登場させて他のソネット集には見られない複雑な人間関係を生みだしている。その緊張した三角（四角）関係の修羅場を潜り抜けて詩人はソネット116にたどりついた。このソネットでは詩人が主張している真実の愛は聖書との類似を待つまでも無く、まさしく理想的な愛の姿である。

しかしシェイクスピアのソネット集における dramatic structure はここで完結しているのだろうか？果たして詩人はソネット116で謳われたような理想的な愛を実現できたのだろうか？詩人の貴公子に対する愛はこのような形で成就したのだろうか？答えは否である。ソネット集で描かれているのは、むしろソネット116の対極にある愛の姿である。思えば詩人の貴公子に対する愛ははじめからいくつかの“impediments”（障害）をかかえていた。彼らはパトロンと詩人という関係であり、若く美しい貴公子に比べて鏡に映った詩人の顔は老醜をさらしている。（ソネット62）二人はいわば不釣り合いな友人だった。そして二人の間に立ちただかる最大の“impediment”として dark lady が現れて貴公子の裏切りが発覚した時、詩人は激しく動揺し、彼に出来たことと言えば詭弁を弄して貴公子を弁護することだけだった。また rival poets に貴公子の関心が移った（alter）時も、彼らの厚化粧を施したような詩作と自分の真実を述べる詩を比較して貴公子の愛を取り戻そうとしたが、成功したようには見えなかった。そして、望むと望まざるとにかかわらず、一時的に貴公子から離れた（remove）こともあった。また、彼は dark lady をはさんだ三角関係に深く傷つきながら、自らも dark lady との愛欲に耽溺していたと告白している。いずれもソネット116の一連で詩人が認めた

くないと否定している愛の姿ではないだろうか。

そして貴公子の美を破壊しようとする“Time”も二人の愛にとって“impediments”の一つとみなすことが出来る。これに対して詩人は二つの対策を準備する。第一に procreation によって貴公子の美を残そうとするが、貴公子に受け入れられなかった。第二に自らの詩の中で貴公子の美しさを永遠化しようとする。これは詩人が乗り越えられた唯一の“impediment”であるといえる。詩人が力強く約束しているように、四百年以上の時を超えて貴公子が今もなおソネットの中で美しく生き続けているのを見る時、我々は静かな感動を覚えずにはられない。

このように詩人は数々の“impediments”を無私の愛によって克服しようとしたが、その殆どに挫折したと思われる。それゆえソネット116はあくまでも理想化された愛の概念であって、ソネット集で描かれた実際の愛とは必ずしも一致していないと言える。言い換えればソネット116において、詩人は自己矛盾を招いている。彼が愛し、後世に残したいと考えた貴公子の美しさはまさしく“rosy lips and cheeks”（薔薇色の唇と頬）であった。従って彼の美しさは“Time”（時）の支配下にあり、“the edge of doom”（最後の審判）まで持ちこたえることは出来ない。そして詩人と貴公子の愛も一時期は“the marriage of true minds”（真実な心同士の結婚）であるようにみえたが、今となっては空しく響く。ソネット集でシェイクスピアが描いているのは理想的な愛を求めつつも、さまざまな障害に阻まれて到達できない人間の苦悩ではないだろうか。多くの男たちと通じている dark lady はいうまでもなく、たぐい稀な美に恵まれた貴公子も“rank smell of weeds”（雑草の悪臭）と表現されるような不道德な一面を持ち、詩人の恋人を奪うというショッキングなことをやってのける人物である。その貴公子に永遠の愛を誓ったかに見えた詩人自身も陰ではdark ladyとの愛欲に耽っていた。詩人の貴公子に対する愛も dark lady との偽りに満ちた性愛も出口の見えない袋小路に入り込んでいる。喜劇を思わせるような procreation のテーマで始まったソネット集はこうして悲劇を予感させて終わっている。詩人があらゆる犠牲を払っても貫こうとした貴公子に対する愛は叶えられたようには見えないからである。

以上述べてきたように、シェイクスピアはソネット集で dramatic structure を駆使して、ソネット集の中に複雑な人間関係を構築し、さまざまな愛の諸相（愛の喜び、不安、嫉妬、熱病のような情欲など）を描き出した。そして同時代の他のソネット集には見られない緊張感のある独自の世界を作り出した。もっとも、しっかりとしたプロットを持つドラマと違って、ソネット集の中で dramatic structure がそれほどうまく機能しているとはいえない。実際ソネット集は一つのプロットが完結したと言うよりはどこか曖昧で不自然な終わり方をしている。その理由として二つのことが考えられるだろう。一つにはソネットという形式上、個々のソネットがそれぞれ独立性と完結性を持っているので、連作と言う形をとっても一貫した

プロットを消化しにくいからである。またソネット集に含まれている全てのソネットが短期間に集中して書かれたものではないという事情もあるのだろう。

それにもかかわらずシェイクスピアのソネット集が今もなお我々を惹きつけてやまない理由としては、これまで述べてきた dramatic structure の他に、いまだ解明されない多くの謎に包まれていること、また個々のソネットの中にみられる豊かなイメージやアイデア、ドラマチックな論理の展開、伝統の巧妙な借用などが挙げられる。更にソネット集の中には時代を超えて色あせることの無い普遍的な真実を含んだいくつかのソネットが散りばめられている。例えばソネット116で歌われている真実の愛は生身の人間には簡単に実現できそうに無いが、現代の我々にとっても目標とすべき “ever-fixed mark” (常に揺るがない灯台) であり、愛の航路に迷った時の “the star” (北極星) になり得るのではないだろうか。

NOTES

- 1) 1609年に Thomas Thorp によって出版された Quarto 版の Shakespeare's Sonnets の献辞に出てくる人物の名前で、これはソネット集で謳われている貴公子を指すとする説と、原稿を持ち込んだ人物の名前であるとする説がある。ここでは前者の説を取る。
- 2) rival poets の候補者としては、Edmund Spenser, George Chapman, Christopher Marlowe などの名前が挙げられている。また Mary Fitton や Elizabeth Vernon などが dark lady のモデルだとされている。
- 3) 他のドラマの中には、以下の作品が含まれる。Love's Labour's Lost, Romeo and Juliet, Richard II, The Merchant of Venice, Henry IV, Hamlet
- 4) J. W. Lever, The Elizabethan Love Sonnet, pp. 1 - 13
- 5) Helen Vendler, The Art of Shakespeare's Sonnets, p. 47
- 6) Samuel Daniel, Delia, sonnet 31, 32, 43
- 7) Joseph Pequigney, Such Is My Love, pp. 42 - 46
- 8) Edmund Spenser, Faerie Queene, Book IV, canto x
- 9) Aran Bray, Homosexuality in Renaissance England, pp. 58-80
- 10) Margareta de Grazia, The Scandal of Shakespeare's Sonnets, Shakespeare's Survey 46, pp. 35 - 49
- 11) スティーブン・オーゲル、シェイクスピア批評の現在、pp. 275 - 277
- 12) Helen Vendler, The Art of Shakespeare's Sonnets, p. 15
- 13) D. Nichol Smith, Shakespeare's England, pp. 182 - 183
- 14) スティーブン・オーゲル、op. cit., p. 272

- 15) If any of you know cause , or just impediment , why these two persons should not be joined together in holy Matrimony , ye are to declare it .
- 16) I Corinthians , 13 , 4

A SELECTED BIBLIOGRAPHY

EDITIONS OF SONNETS

- Ingram , W. G.. and Redpath , Theodore , ed . Shakespeare's Sonnets . London , 1964 .
- Wilson , John Dover , ed . The Sonnets . Cambridge , 1966 .
- Booth , Stephen , ed . Shakespeare's Sonnets . Yale University Press . New Haven and London . 1977
- Kerrigan , John , ed . The Sonnets and A Lover's Complaint . Penguin Books . 1986
- Vendler , Helen , ed . The Art of Shakespeare's Sonnets . The Belknap Press of Harvard University Press . 1997 .

本論で取り上げたソネットは Vendler 版を採用した。

なお、本文中のソネットの翻訳については、西脇順三郎、高松雄一郎両氏の訳を参照した。

OTHER BOOKS

- Bloom , Harold , ed . William Shakespeare's Sonnet : Modern Critical Interpretations . New York , Chelsea House Publishers , 1987
- Bradbrook , M. C . Shakespeare and Elizabethan Poetry . Harmondsworth , 1964 .
- Bray , Alan . Homosexuality in Renaissance England , Columbia University Press , New York , 1982
- Daniel , Samuel . Delia . Menton , Yorks , 1969
- Empson , William . Seven Types of Ambiguity . Harmondsworth , 1965 .
- Guss , D. L . John Donne Petrarchist , Detroit , 1966
- Hubler , Edward . The Sense of Shakespeare's Sonnets . New York , 1952 .
- Knights , L. C . Explorations , Harmondsworth , 1964
- Krieger , Murray . A Window to Criticism . Princeton , New Jersey , 1964
- Leishman , J. B . Themes and Variations in Shakespeare's Sonnets . London , 1968 .
- Lever , J. W . The Elizabethan Love Sonnets . London , 1968
- Pequigney , Joseph . Such Is My Love , The University of Chicago Press , 1985
- Schiffer , James , ed . Shakespeare's Sonnets Critical Essays , New York , 2000
- Sidney , Philip . Defence of Poesie , Astrophil and Stella . ed . Porges - Watson , Elizabeth ,

Everyman Paperbacks , 1997

Smith , D . Nichol . Shakespeare's England . Oxford , 1916

Spenser , Edmund . Poetical Works . ed . J . C . Smith and E . De Selincourt . London , 1965

Spergeon , Caroline . Shakespeare's Imagery . Cambridge , 1966

Stirling , Brentis . The Shakespeare Sonnet Order: Poems and Groups . Berkeley and Los Angeles , 1968 .

Winny , James . The Master - Mistress . London , 1968 .